

《その他》

木曽観測所でヘールボップ彗星を撮影



写真は木曽観測所105cmシュミット望遠鏡を用いて1997年3月6日未明5時1分ごろに青い光に感度のある36cm画乾板にて撮影。露出時間5分、写真は乾板からの密着焼きポジ。画面の角度は6度×6度四方。彗星までの距離は約1億5千万キロメートル。

巨大なコマ（先頭の明るい芯）から、プラズマテールが北西（右上）に、ダストのテールが西北西（右側）にむかってのびている様子がわかる。プラズマテールは彗星からの電離したイオンのガスが太陽系空間の磁場やプラズマ（太陽風）によって太陽と反対側にむかって吹き流されたもので、磁力線の無数の筋が見える、ダストテールは彗星核から吹き出した塵の粒子が太陽の光の圧力を受けながら軌道運動をしているもの。

祖父江 義 明（天文学教育研究センター）
sofue@mtk.ioa.s.u-tokyo.ac.jp

吉 井 譲（天文学教育研究センター）
yoshii@mtk.ioa.s.u-tokyo.ac.jp

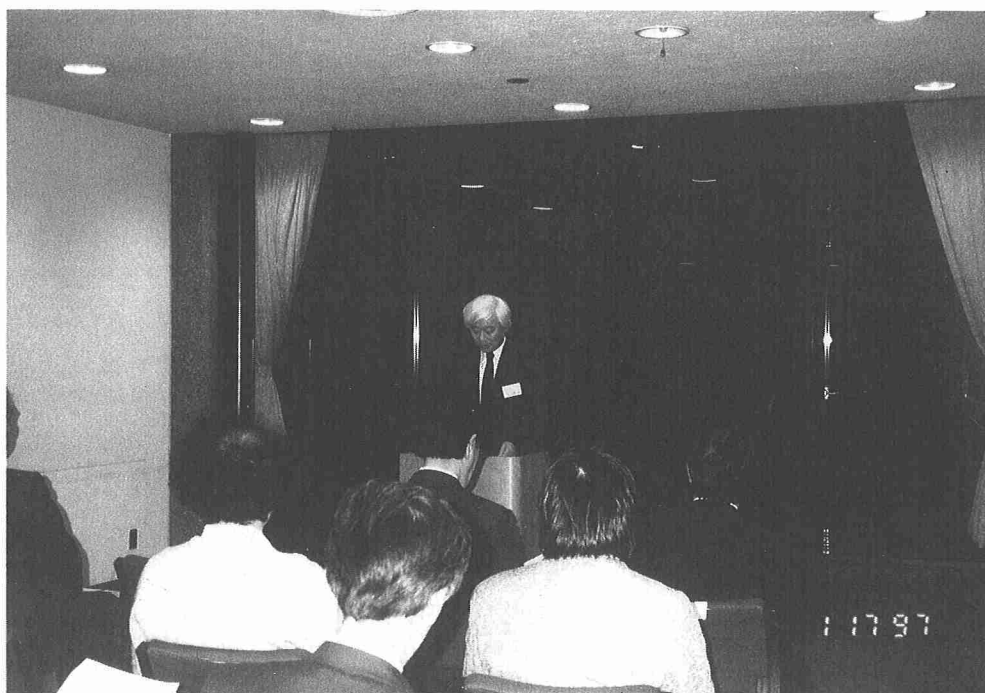
東京大学情報学リエゾン推進室発足式開催される

東京大学情報学リエゾン推進室は、昨年10月に「情報学教育に関する懇談会」中間報告（平成8年5月21日評議会）の趣旨に基づき、総長の管理の下に、主として東京大学における多岐多部署にわたる情報学の教育研究体制を有機的に結合し、更に創造・発展するための教育研究体制の調査検討を行うことを目的として設置された。

これを記して、1月17日（金）午後6時から山上会館において、学内の関係者の出席を得て発足式が行われた。同推進室の合原一幸助教授の司会により、吉川弘之総長から挨拶があり、引き続いて、益田隆司理学系研究科長

（推進室長）から推進室の概要説明、武市正人教授（工学系研究科計数工学専攻長）から「情報学が目指すもの」と題して、今後、推進室の進むべき方向について説明があった後、鈴木昭憲副学長から祝辞をいただいた。

式終了ののち懇談会に移り、蓮實重彦副学長から祝辞をいただき、岡村 甫工学系研究科長による乾杯の音頭で祝宴に入った。祝宴は、リエゾン推進室の出発を祝って終始和やかな雰囲気の中ですすめられ、午後7時50分盛会裡に終了した。



発足式にて挨拶をされる吉川総長

理学系研究科・理学部教職員と留学生・外国人研究員との懇談会開かれる

去る、1月27(月)午後6時から山上会館1階談話ホールにおいて、教職員と留学生・外国人研究員との懇談会が開催された。

現在、理学系研究科・理学部には、大学院留学生131名(男性101名、女性30名)、学部留学生5名(男性のみ)及び25名の外国人客員研究員が在籍している。今回の懇談会には、教職員・チューターを含め約120名の参加があった。

会は益田理学系研究科長の挨拶で始まり、小間評議員による乾杯の音頭の後、会場は和やかな雰囲気の中で歓談が続けられ、各所に活発な国際交流の場が広がった。司会は国際交流室の都河講師により行われた。

会半ばで、川口留学生センター長からの挨拶があり、続いて留学生2人のスピーチが行われた。地質学専攻の研究生謝冠園さん(台湾、女性)は日本の印象と自分の

研究について愛嬌たっぷりに話し、生物化学専攻の研究生アンソニー・プールさん(ニュージーランド、男性)は科学の未来について自分の考えを述べ、その内容の濃いスピーチには惜しめない拍手が送られた。

次に、地質学専攻の研究生劉先文さん(男性)をはじめとする中国人留学生が集まって即席に「ふるさとの春」を合唱し、また、飛び入りで客員研究員のお嬢さん張美中さんも可愛い歌声を披露してくれた。最後に、物理学専攻の博士1年孫珍永さん(男性)を中心に結成された韓国人留学生の合唱団が歌を2曲披露し、とりわけ韓国語と日本語で歌った『釜山港へかえれ』は大きな喝采をあげた。

最後に、理学系研究科国際交流委員会委員のゲラー助教授(地球惑星物理学専攻)による閉会の辞があり、全員で記念写真を撮影後、午後8時に成功裡のうちに散会した。



理学系研究科長と理学部職員組合との交渉

1996年11月25日、12月24日および1997年1月27日に益田研究科長、柚原事務長と理職との間で定例研究科長交渉が行われた。主な内容は以下の通りである。

1. 職員の昇級・昇格等の待遇改善に関わる問題について

1) 技術職員

11月の交渉で理職は、技術部組織図の主任ポストについて選考の結果および主任ポストを4名しか埋めない理由を質した。これに対し事務長は、12月1日付けで発令の上申をしたと答え、4名である理由は1系統15人で45名の組織に対しては、3系統相当のポストしかうめられないためであると回答した。これについては、文部省や東大本部の指導をうけていると説明した。12月の交渉で理職は、局長交渉では前任技術専門職員は部局が要望すれば何人でも認めるという本部の説明があったことを指摘し、理学部技術職員の年齢構成が50代に山があり、昇格をスムーズに行うため前任技術専門職員を増やすよう要望した。事務長は、組織のバランスを考えると、専門職員を無制限に増やすことはできないと回答した。組織図は12月の交渉後に理職に手交された。

12月の交渉で理職は、技術職員の6級昇格について、理学部から本部への推薦順位付けの基準を質した。事務長は技術部長を含めて総合的に判断し、号俸の他に経験年数、職務内容、採用基準、資格なども判断基準として回答した。これに対して理職は、技術職員の職務そのものを正しく判断すべきで、学位や資格を判断基準とするのはおかしいと主張した。事務長は職務内容はもちろん重要であり、研究科長も教授会で支援を受けた技術職員の名前を論文等を書くことを教官に求めていると説明したうえで、しかし学位は技術職員の向上をはかるものとして適切であると答えた。

1月の交渉で理職は、昇格基準を満たしている職員の4・5・6・7級の昇格要望書を手交して上申を要望した。これに対し事務長は、2月に要望を上申すると回答した。

技術職員の専門行政職移行問題について、11月の交渉で理職は、国大協の総会における議論の内容と今後の見通しについて質した。研究科長は、総会では人事院等の抵抗があり、現在の枠組みの中で工夫して処遇改善を図る必要があると答えた。理職は文部省は全大教との会見で官職の設定は困難であり、専門員・専門職員など実現可能なものを要望するという非常に後退した形になっていることを指摘した。理職は当局の対応を質し、事務長は東大内部では今のところ動きはないと答えた。

2) 事務職員

11月の交渉で、理職が今年の昇格に関する方針を質したのに対し、事務長は事務の活性化をはかるという立場から、5年以上同じ場所にいる人には積極的に異動して

もらうと答えた。また、事務改善要望のアンケートの理学部での取り扱いを問うたところ、事務長は専攻長に教官のアンケートはまとめてもらい、いっさい手を加えず本部に提出したこと、理学部内で改善できるものについては専攻長会議にフィードバックし検討していく考えであることを回答した。

12月の交渉で理職は、生物科学教室事務主任の6級昇格を要求した。これに対し、事務長は1月の交渉で、過去に退職2年前に6級昇格した例は係長歴が10年以上あったためであり、これが一つの目安であると答えた。さらに、平成9年度は無理であろうが、10年については可能性はあると回答した。

3) 図書職員

1月の交渉で、理職は昇格基準を満たしている職員の5・6級昇格要望書を手交した。これに対して、事務長は2月に要望をだすと答えた。

4) 行(二)職員

理職は毎月の交渉において、行(二)職員の処遇改善について要請した。事務長は、東大本部でも理学部からの要望は承知しているが、他部局に年齢的にも号俸も上の人がいてむずかしいと答えた。また、当該職員の勤務ぶりは理解しているが、行(二)業務以外のことは評価対象にならないこと、具体的な数字はわからないがすぐに順番が来ることはないことを説明した。理職は引き続き昇格実現に努力してもらいたいと要望した。

2. 第9次定員削減について

11月と12月の交渉において理職は、第9次の定員削減の理学部への割当について質し、それを返上するように要請した。さらに理職は、定員削減は教室系職員とりわけ技術職員に集中する結果となっており、定年者から定削に割り当てていくことを引き続き行っていくと技術職員の数がますます減少してしまうので、技術部長である研究科長は技官を定削にまわすのは望ましくないと外に向かって主張して欲しいと12月と1月の交渉で要望した。12月の交渉で、研究科長は部局長会議で受けてきたので、割当を返上するようなことはできない、しかし、定員削減はきびしいと述べ、1月の交渉で、理学部への割当は平成9年から13年の5年間で職員は14人助手は2人であると説明した。技術職員への定削の集中について、研究科長は技術職員が定削に関しては一番弱い立場にある上、さらに専行職移行も困難となり、これでは良い人材は来ないのもっと良い処遇ができるように変えていく必要があると述べた。理職は、技術職員への定削の集中に対する理学部の対応が理学部支援組織の今後にとって非常に重要であり、この問題について現状分析を行ってほしいと要望した。1月の交渉で、第9次定員削減に対する

理学の対応の方針を質したのに対し、事務長は、2月の人事委員会で検討することになっていると回答した。

3. 教室事務・図書職員の組織化問題について

12月の交渉で、事務および図書職員の組織化に関する検討委員会ができたこと、またその委員会のメンバーが明らかとなった。理職は1月の交渉で教室事務および図書職員の組織化に関する第一回の検討委員会の内容と、今後の予定を質した。事務長は、第一回は現状の勉強会をやったと述べ、5月頃までにはまとめて、平成10年度の概算要求に間に合わせたいと答えた。また、職員に対する説明会をし、教室の意見も反映させるつもりであると回答した。これに対し理職は、内容的に重大であり、時間をかけて十分な検討が必要であるにもかかわらず、平成10年度の概算要求に出す理由を質した。事務長は、図書職員の組織についてはすでに5回くらい話し合いの場を持ち、組織化に伴うメリット・デメリットを検討しており、実施が遅れれば待遇改善が遅れる事になると回答した。理職は組織化による待遇改善の具体的可能性を質した。事務長は、現状では教室に専門職員はおけないが、組織化によりそれが可能となり6・7級への道も開けること、図書職員は現状では停年時6級であるが、組織化して係長や専門職員をおくことにより、待遇は改善することになりうることを、さらに、組織化により定員削減に対応可能であることを回答した。理職が教室事務職員の組織化後の所属を質したのに対して、事務長は中央所属となると答えた。理職は拙速に事を進めるのは問題であり、職員との話し合いの場を持つこと、研究科長が委員会に内容公開を指示するよう要請した。研究科長は、

壽榮松委員長に話すと答えた。

4. 理学部新一号館・理学部図書館の建設問題について

12月の交渉において理職は理学部図書館建設の可能性を質した。研究科長は新1号館2期工事には含まれていないと答えた。これに対し、理職は理学部図書館が2期工事に含まれることは過去の科長交渉において確認してきたことを指摘し、無責任な回答をであると問題とした。さらに、理職は今後の交渉における責任ある回答を要請し、科長は同意した。事務長は、理学部休養室と理職の部屋については確保されていると説明した。

5. 柏キャンパス問題について

11月の交渉で理職は、柏キャンパスの進捗状況、職員組織の内容を質したのに対し、研究科長は、理学部の中にワーキンググループを二つ作りアカデミックプランを検討中であること、また、柏の研究組織の構造が決定していないため職員については、まったく検討していないことを回答した。12月の交渉では、東大としてのプロデューサーとアドバイザーが決まり、アカデミックプランを作成しており、来年の概算要求に出す予定でまとめていると述べた。

6. 教官任期制について

理職は、教官任期制導入の問題に関する研究科の考えを問うたのに対し、研究科長は教授会で正式に決まっていはいないが、将来計画委員会などでは理学部には好ましくないという結論になっており、きわめて慎重な態度で望むというのが現在の立場であると答えた。

人事異動報告

(講師以上)

所 属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
天 文 研	助教授	川 良 公 明	9. 1. 1	採 用	
物 理 教 授		早 野 龍 五	9. 1.16	昇 任	助教授より
〃	〃	大 塚 孝 治	〃	〃	助教授より
植 物 園	助教授	館 野 正 樹	9. 2.16	併 任	本務：群馬大学

(助手)

所 属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
物 理 助 手		田 村 裕 和	8.12. 1	昇 任	東北大助教授へ
地 惑	〃	宮 田 元 靖	8.12.31	辞 職	
動 物	〃	三 好 三 咲	〃	〃	
化 学	〃	栗 原 正 人	9. 1. 1	採 用	
中 間 子	〃	岩 崎 雅 彦	〃	昇 任	東工大助教授へ
植 物 園	〃	下 園 文 雄	〃	配 置 換	技官より
化 学	〃	此 木 敬 一	9. 1.16	採 用	
〃	〃	市 田 光	〃	休職更新	9. 7.15まで

(職員)

所 属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
化 学	事務官	中 山 明 美	9. 1. 1	転 任	京都大工学部へ
〃	〃	谷 めぐみ	〃	〃	京都大より

博士（理学）学位授与者

平成8年12月16日付学位授与者（4名）

種 別	専 攻	申 請 者 名	論 文 題 目
課程博士	情報科学	千 葉 滋	コンパイル時メタオブジェクト・プロトコルに関する研究
〃	情報科学	宮 田 高 志	自然言語処理における推論の制御に関する研究
論文博士	物 理 学	柏 谷 聡	超伝導トンネル分光の実験及び理論研究
〃	化 学	池 上 努	アルゴンクラスターイオンの断熱・非断熱過程の理論的研究

平成8年12月27日付学位授与者（1名）

種 別	専 攻	申 請 者 名	論 文 題 目
課程博士	地球惑星物理学	宮 崎 明 子	窒素と希ガスのシリケートメルトへの溶解度の研究

平成9年1月20日付学位授与者（5名）

種 別	専 攻	申 請 者 名	論 文 題 目
論文博士	情報科学	吉 浦 裕	不完全表現からの意味の復元モデルを用いた理解方式の研究
〃	情報科学	タイ チュウ ラン	複雑な曲面をモデルするためのレーブグラフに基づく位相幾何モデルとホモトピー曲面法
〃	物 理 学	樋 上 和 弘	可積分系および長距離相互作用をもつ模型の研究
〃	物 理 学	武 田 靖	回転クエット体系での流れの遷移
〃	生物科学	出 田 立 郎	男性ホルモン依存性遺伝子および男性ホルモン・レセプター関連遺伝子の単離と解析に関する研究

平成9年1月31日付学位授与者（1名）

種 別	専 攻	申 請 者 名	論 文 題 目
課程博士	地球惑星物理学	羽 鳥 友 彦	解析試験関数を用いたDSMによる理論地震波形計算とその波形インバージョンへの応用

平成9年2月17日付学位授与者（5名）

種 別	専 攻	申 請 者 名	論 文 題 目
課程博士	地 質 学	阿波根 直 一	北西太平洋における過去12万年間の生物起源粒子の堆積過程
〃	物 理 学	佐 甲 博 之	11.7AGeV/CにおけるAu + Au衝突からの反陽子生成
論文博士	化 学	飯 塚 泰 雄	三酸化モリブデン表面の活性酸素の挙動とCOおよびH ₂ の酸化反応機構
〃	地 質 学	金 聖 烈	サイドスキャンソナー映像資料処理による韓国東南海域迎日湾における海底面の音響特性
〃	物 理 学	中 山 一 昭	非線形力学系の幾何学的方法による解析

編集後記

井 本 英 夫 (化学専攻)
imoto@chem.s.u-tokyo.ac.jp

平成8年度理学部広報の最終号第4号をお届けいたします。今年度最初で最後のこの編集後記で、この1年間ご寄稿いただきました皆様方に御礼申し上げます。今年度は、年間4号発行の計画が久しぶりに実現でき、また、内容的にも留学生の皆様からの文章を掲載し、研究ニュース欄を大きくするなど、充実したものとすることができました。これは、理学部事務部の皆様の御援助のお陰によるものであり、編集委員一同深く感謝いたします。

情報過多のいわれるこのごろ、読まずに捨てられる理学部広報も数多くあると思います。しかし、すぐ隣でどんな人がどんな研究をしているのかほとんどわからなくなって来ているこの時代に、理学部広報はむしろ有用になってきているように思います。

理学部広報の原稿や表紙の写真はいつでも募集しております。内容、形式については特に規定はありませんので、各号館の編集委員（広報の末尾にリストがあります）または理学部庶務掛までお持ち下さい。

編集	井 本 英 夫 (化学専攻) imoto@chem.s.u-tokyo.ac.jp	内線	4 3 6 1
	野 本 憲 一 (天文学専攻) nomoto@astron.s.u-tokyo.ac.jp		4 2 5 5
	堀 内 弘 之 (鉱物学専攻) horiuchi@min.s.u-tokyo.ac.jp		4 5 4 2
	江 口 徹 (物理学専攻) eguchi@hep-th.phys.s.u-tokyo.ac.jp		4 1 3 5
	西 田 生 郎 (生物科学専攻) nishida@uts2.s.u-tokyo.ac.jp		4 4 7 6
	奥 抜 義 弘 (庶務掛) okunuki@adm.s.u-tokyo.ac.jp		4 0 0 5

印刷.....三鈴印刷株式会社